

スマート農業で人手不足に対応 若きみかん農家たちの挑戦



450年以上にもなるみかん栽培の歴史を持つ和歌山県。初代紀州藩主徳川頼宣が、有田・下津地域にみかんの栽培を奨励し保護したのが商業栽培における始まりとされ、今では20年連続日本一の生産量を誇っている。産地の一つ有田川町では、若手農家たちが農業団体「むちころふあーむ」を立ち上げ、人手不足という課題に向き合っている。代表の小川祐司さんは農業を始めて14年目の34歳。「繁忙期であるみかんの収穫時期はアルバイトを雇うのですが、人手不足はみかん農家の多くに共通する課題です。その

ため、複数の個人事業主により立ち上げた団体では、団体内における人材や仕事のシェアをしています。それでも収穫が始まる10月から4ヶ月ほどは、休みがないほど忙しい。そこで積極的に導入するのが「スマート農業」だ。「共同倉庫に、みかんの目視選別をサポートする機械「Rakuda」を2年前から導入しています。そのおかげで傷の大小や水腐りなど果実の状態を見極めるのに必要だった人員を削減することができました。また、防除等のために行う農業散布で使用されるスプリンクラーの設置

には1haにつき1千万円以上が必要で、買い替えが数十年先だとしても厳しいかもしれない。そこで注目しているのがドローンです。産地全体において、今はまだ利用件数は少ないですが、スマート農業には欠かせない要素になると思い、当団体では、ドローンの機種や用途ごとに異なる操縦資格を分担して取得することを考えています。それは自分たちの畑だけのためではなく、今後地域で拡大するドローン需要に対応するためです」。



①和歌山の企業、(一財)雑質技術研究所が開発した外観選別装置 Rakuda (ラクダ)。手作業での目視選別の負担を減少し、選別時間の短縮にも繋がったという。②むちころふあーむ代表の小川さん。③現在一部の園地を企業に委託し、ドローンによる農業散布を行っている。



都市と地域の人を繋ぐ 梅収穫ワーケーション

60年連続、梅の生産量日本一を誇る和歌山県。それでも生産者の高齢化に伴う担い手不足は避けられない課題である。そこで課題解決につながる取り組みとして注目を集めているのが「梅収穫ワーケーション(以下、梅ワー)」だ。「5月〜7月の間、都市部で働く人々が梅農家さんの作業をお手伝いするため、みなべ町を訪れています。青梅をいんだり、完熟して梅畑に落ちた梅の実を拾うなどの単純作業ですが、梅農家さんと参加者の双方にとって良いことがたくさんあるんです」と語るのは、(一社)日本ウェルビーイング推進協議会代表理事の島田由香さん。都市部からの参加者にとって、一次産業の現状を感じることができただけでなく、心身のリフレッシュや作業に没頭することで集中力を高めることにも役立てられるという。2022年にスタートしたこの取り組みは、翌年から企業向けの人材育成プログラム「TUNAGU」となり、他地域にも好影響を及ぼすなど、さらなる広がりを見せている。



①没頭没入の梅収穫作業で心と身体もリフレッシュ!写真は2022年度の体験者たち。②新しい剪定方法などの研究にも積極的に取り組み、島田さんも枝切りハサミをもって、農家のみなさんと技術情報をシェアしている。③1月の寒い日でも次の収穫に向けて、島田さん(右)とわきあいあいと話しながら、梅の枝を剪定していた梅農家さんたち。左から山本康雄さん、貴子さんご夫婦と、東光淑行さん。

(一社)日本ウェルビーイング推進協議会
住所／沖縄県南城市玉城船越218-1
電話／070-9061-1542

リフレッシュできるようにしました。すきま時間には参加者の方にSNSの始め方を教えてもらったりして、梅ワー後も連絡をとりあうような関係になり、今では新しい親戚が増えたような気持ちです。また、他県の柑橘農家さんが手伝いに来てくれたことをきっかけに、地域や栽培品目をまたいでの交流も始まりました。まさしく人と人、心と心を繋ぐ体験であり、継続的な繋がりは、地域の人手不足を解決するひとつの策であるかもしれない。

